

大友義長が遣明船を留め置いた外浦の港（宮崎県日南市南郷町）



大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

大友義長

大友義長は、戦国時代中期の武将です。文明10（1478）年に大友親治の子に生まれ、20歳の明応6（1497）年に大友家第19代当主に擁立されたと言われます。

永正15（1518）年41歳の時に、父親治に先立って没しますが、その治世の大半は隠居した親治との共同統治の形で、父と共に大友家の戦国大名化を成し遂げた人物と評されます。

九州中央域に勢力を拡大

大友義長は、豊後国に隣接する肥後国（熊本県）や筑後国（福岡県南部）にも広がります。肥後国守護職の菊池政隆の下で内紛が勃発すると、永正3（1506）年、阿蘇惟長を支援して肥後に侵攻して政隆を失脚させます。菊池家には惟長が入嗣（養子になること）し、菊池武経と名乗って肥後国守護職を継承しますが、今度は義長がその武経を追放して、実質的にこの地域を支配しました。また、筑後国でも、有力領主星野氏などの反抗を鎮め、豊後から筑後・肥後北部にかけての九州中央域に勢力を拡大しました。

さらに、義長の勢力圏は、陸地のみでなく、海上にも及んでいます。大友家の家臣岐部の家に伝わる「岐部文書」によると、永正8（1511）年に中国での朝貢貿易を終え、九州沿岸まで戻ってきた遣明船のうちの「二号船」の中で、暴動が起こったことが分かります。その原因は定かではありませんが、当時の遣明船1艘の乗船者は百数十人です。狭い船内は緊迫した状態に陥ったものと思われま

す。この事態に対して、大友義長は、家臣団に次のように命じています。「方々に追手を懸け候の間、日州外浦において留め置き候。いよいよ彼の船、出船なきよ、覚悟致すべく候の條、諸浦に警固舟の事を相催し、急度差し下るべく候。誠に国家の外聞、この題目に候」。

現代語に訳すと、「騒動が起こった遣明船に各方面から追っ手をかけ、船を日州の外浦（宮崎県日南市南郷町）に係留させた。取り調べが済むまで船が出航しないよう見張る必要があるため、配下諸浦の家臣に警固船の準備をさせ、急ぎ現地の港まで出向くべし」との文意になります。

義長にとって、遣明船内の騒動を無事に鎮めて、船と積み荷を安全に護送することが、いかに重要命題だったかが伝わってくる書状です。特に文末の、「これは誠に国家の面目に関わる事件だ」との言葉は印象的で、九州の戦国大名にとって、陸上加えて、その沿岸海域を軍事・経済的にコントロールする制海権が、「国家」の一大事と認識されていたことが分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）